

大宮神社

—国歌君が代発祥の地—



福元 忠一

大宮神社には、毎年大晦日から元旦にかけて神楽舞が舞われるが、一番の大祓に始まって、二十六番の神道までであったらしい。入来町誌下巻によると、その中の一つに、十二人剣舞があり、「すめらぎの国の初めを尋ぬるに、銚のしづくや葦原の里」という和歌を朗詠し、つぎに「君が代は千代に八千代にさざれいしのいわほとなりて苔のむすまで」と朗詠される。

ひきつづいて「さって言語道断言語道断鬼形がおさえしかの地のところに、太刀を結界捧げあることは、これ不審とも不審なり。よ

く開くものならば、許すべし。また悪しく開くものなれば、彼の御標の内に七日七夜の大牢をさせんとや。所の禍神み神楽の障りとなるべし。何の疑いもあるべけん。さってこれより十二方に立つたる神は、いかなる神の變化にてましますか。疾う疾う開け、我は聞かん。」

この時十二人は立つて鬼神の前へ出て、「君が代は千代に八千代にさざれ石のいわほとなりて苔のむすまで」と歌い次の祭文を唱えて十二方に正座する。

再拝再拝敬つて申す。抑抑中央はさもけしからん御姿となりて、四方四面をとがめ給うは何の仔細に候や。抑抑この御神針と申すは、天照大神天の岩戸に閉じ籠らせ給うに依りて、常闇の夜となり、八百万神達岩戸の前に神集いまして神楽を奏し百舞給えば常闇の雲晴れども諸神達は手を上げて、あな面白やと力強

くも舞給う。

今にその式を唱えて此所に御神屋を作り、注連縄引き渡し、十二方に剣を結界、地を定め彼所を鎮め、鶴の千年亀の万年千代八千代に無息円満に、四神相応の地と鎮め申し奉る所なり。再拝リリ、敬つて申す。さらに続くが、これをもつてわが入来こそは「国歌君が代発祥の地」と云われる所以である。

また、隣接して梶原神社があり、そこには総石作りの鳥居が立っている。明治三十九年八月建立の文字はかすれて時の流れが歴史を思わせる。

地元のすぐ近くに昔、「石の場」といわれた採石所跡があり、ここで作られ、運ばれたのではないだろうか。およそ高さ四メートル横幅四メートルぐらい、柱の直径三十センチぐらいを想像すれば、地域の戦勝の満足が一方ならぬものがあつたに違いない。

しかも、向かつて右側の柱の根元には、「征

露記念」と刻まれているが、いうまでもなく、

「ロシヤを征服した」の意味である。従軍のわが日本兵士達は、「勝つてくるぞと勇ましく」、荒野にラツパを轟かせながら、背囊の中には、腹痛みの薬の用心に「征露丸」を用意していた。それが証拠に、製薬会社の商標には、進軍ラツパのマークが最近までついていた。

ふと気づくと、ラツパのマークが変つていのに気づいた。

第二次大戦後、戦勝国のひとつから「ロシヤを征服した征露」とはなにごとかとクレームがあつたとか、無かつたとか。

そのせいかラツパとともに「征露丸」は「正露丸」にかわつている。つまり、「ロシヤを征服」が「ロシヤが正しい」になつたのだろうか。
(元入来町長)



大宮神社 (2013年1月1日撮影)



入来神舞／十二人剣舞 (舞人は衛門隼人を象徴しているといわれる)